

# 広 報 第 102 号

## 2021 年 7 月

### 令和 3 年

発行人 区長 長井 通好  
 編集 広報誌編纂室  
 事務局 TEL.0795-23-4639  
 世帯数 2,924世帯(野村町)  
 17,268世帯(西脇市)  
 人 □ 7,236人(野村町)  
 39,495人(西脇市)  
 (7月1日現在)

# の む ら



と撮り鉄の真似事をしてみました。  
加古川と杉原川の合流地点

## 笑顔で明るいまちづくり

野村町まちづくり推進協議会

会長 前原 義継



町内会長を務め  
終え町役員を引受

けたと思つたとたん新型コロナウイルスの流行、三密、外出自粛、昨年は町全体としての自治活動が出来る状態では無かったです。

今年もまだまだ昨年以上の感染者が市内にも出ています。

唯一町民全体で楽しめる運動会も中止になり非常事態宣言のたびに公民館も使用禁止になり各種サークル活動も低迷しています。

今は我慢の時。野村町も三、〇〇〇世帯近くに増えています。何か一つアピールとして

町中をいつも綺麗にして「美しい街」と言われるようにしたいと思います。

普段から我家のまわりは我家でという気持があれば出来るかなと!!私個人の思いです。

話は変わりますが活動が少ないな感じです。今回のまちづくり委員で何か一ツ残したいと計画をしています。

また以前の生活に早くもどる事を願うばかりです。

## 石碑・地蔵・小祠

田舎の町はどこでもそうだと思うが、町内にいくつか石碑、地蔵、小祠があつて、文化財というのはおこがましいが昔から近隣の人達から大切に守られてきていて、また心の拠り所になっていて、これは日本人のいい風習だと思う。わが野村町もご多分にもれずこういうものがあります。忠霊塔、東田経吉翁の頌徳碑、上所と西所のお地藏さん、南所の地藏堂、加古川河畔の大歳の神などですがまだまだ私の知らないものがあるかも知れない。

昔からこういうものの「守り」は近隣の人達の善意に頼つてそれが当り前のようになつてきました。ところが高齢化が進み代替りしたり、またよそからたまたまこれの近くへ来られたりして急に「あんたも守りに加わつてな」といわれても、そもそもその歴



史も由来も知らない人が「何で私か」と思うのも無理のない話で、それなら町が一括して維持管理をすべきものかというところも何か割り切れないものがある。今されている人の善意、心をないがしろにする所為のようにも思える。いずれにしてもこの先も続けられるにはどういった形が一番良いのか諮らねばならないと思います。町の会議にかけるような緊急の大事ではありませんが有志が集つて知恵を出し合つてみたいと思つています。

## 今年の阪神は強い

私は縁もゆかりもない街をいかにもその街の住人みたいな顔をして、今し方家を出てきたというラフな格好で市民広場をジョギングしたり路地裏を散歩したりするのが好きで、人から見たら変な趣味だろうが、そもそも他人の趣味嗜好はなかなか理解しがたいもので、あれの何が面白いんだろうと思うことがよくありますが、他人の趣味を云々すること程趣味の悪いことはありません。

さて、過日三田のウッドイタウンへ行つたときのことです。三田ホテルの裏に貯水池があつてそこから幅5メートルほどの用水路が流れ出ている。橋が散歩コースになつていて、橋が何本かかかつていて一番下流の橋を渡つて向う岸を引き返してくるとかなりの距離になつて小一時間程のちょうどいい運動になる。そのコース二度目の時でした。三田ホテルから二百米程下つたところに道端に水を張つたブリキのバケツが置いてあつて真新しい花が一杯に投げ込んである。これは何だ、と近付いてみた。バケツの横に野球のボールがあつて何か書いてある。しゃがみこんで手に取つて読むと、こうあ

つた。「航太、今年の阪神は強い。優勝するかも。楽しみに待つてろよ。」私はしばらくこの文字をながめていたがだんだん涙が潤んできた。不覚にも道端で泣いてしまった。この航太くんがこの場所で大慮の死を遂げたに違いない。しかし何でこんなところで？ 回りを見回したが事故が起こりそうな場所ではない。クルマは入れないし獣が出そうなどでもない。一方が崖でその上は住宅街である。ただ、反対側の用水路の川床までかなりの高さはある。誤つてここから落ちて打ちどころが悪ければ、と唯一思い当つた。

航太くんが何才くらいの子供かは文面からはわからない。小さい子供でお父さんがこれを書いたのか、高校の野球部の部員で仲間が書いたのか、それもわからない。ただ、航太くんが阪神ファンだったことははっきりわかる。私は航太くんのような阪神ファンでもないしさらにはプロ野球ファンですらない。どのチームが勝とうが負けようが全く私の関心の埒外だったが今年だけは航太くんの冥福のために阪神の優勝を心から願うのであります。

補。航太くんと書きましたが、或いは航基航介だったかも知れない。航の一字だけは覚えている。



## わたくしごとですが…

二か月ほど前のことです。毎日毎日棒グラフや日本地図でコロナの感染状況を見せられて鬱々たる日々が続く、思いがけないニュースが飛び込んできた。私は寝っ転がってテレビを見てたんだが、「十倉氏が経団連会長に就任」という。私は跳ね起きて思わず正座してニュースに見入った。「うーん、こいつあ凄い！ホンマに偉い。とうとうやったな」と賛嘆した。早速祝電ならぬ祝メールを送った。末尾に「忙しいだろうから返事はいりません」と書いたんだが、その日の夜だったか次の日だったかに丁寧な返事がきた。まあ、ここいらへんが普通の人と違うんですね。人間ちよつとエラくなると昔の仲間や知り合いを黙殺したり無視したりするもんだが、私みたいに田舎でくすぶっているような者にもきつちり礼に合った対応をしてくれます。「実るほど頭を垂れる稲穂かな」の見本みたいな人です。世の中の長と呼ばれる人達、首長理事会長委員長院長などに見習ってほしいもんです。私と十倉くん

(こんな偉い人にくん付けは失礼なんだが昔からそう呼んでいて今更十倉氏十倉さんも変な感じなんでそう呼ばせてもらいます)とは若い頃からいささかの付き合ひがあつて、彼は西脇高校の一級下だが同じ年に同じ大学に入つた。つまり私が一浪した。古い話なん

44年、あの悪名高い東大入試のなかつた年です。受験生はみんな狼狽しました。だつて上から順番に一段づつ降りてくるんだもの。東京では東工大一橋早慶、関西では京大阪あたりまでは影響はあつただろう。学生運動の嵐が吹き荒れる年で私はこんな時にしかも学生運動の中心地と目されていた大学に在籍を置いたまま神戸で予備校に通い来年の東大合格を目指した。その年は大学の授業はほとんどなかったが私は学内の図書館に通いつめた。昼は地下の食堂でパンと牛乳ですませ、丸一日居ましたね。早稲田の図書館は都内でも有数の蔵書を誇つていて私みたいな書痴にはよだれが出るようなところで、独立した石造りの荘厳な建築物で、まるで神殿のように思われた。あの図書館だけは今でも懐かしい。私のことを書き過ぎました。十倉くんのことです。十倉という苗字は西脇に一軒しかなく何代か前にどこから移り住んだのだろうが、丹波に十倉という姓がありますね。丹波の古文書なんかを読んでも(勿論活字に起こしたものです)

「いついつの戦に十倉某という国衆(小豪族)が郎党を率いて馳せ参じた」といつた記述が散見される。或いはその裔かも知れない。母方のおじいさんという人が偉かつたそうで、戦前の台湾の旧制高校の校長だつたそうで、旧制高校の校長といえば今の大学の学長ですからね。もともと頭のいい筋な

んだ。さて、次の年、十倉くんはめでたく東大の文Ⅱに合格して再度上京した。どういふわけだか十倉くんが早稲田の近くに下宿し私が随分離れたところからよく彼の下宿に立ち寄つた。段々親しくなつて信州へ旅をしたり、私が映画狂だつたので映画を見に行ったり、東京の名所巡りに連れ出したりした。いつもニコニコして付き合つてくれたが今にして思えば迷惑してたのかも知れない。それから二、三年して今度は弟の好紀くん(又してものくん付けをお詫びしたい)が東大の理Ⅰに合格して兄貴と同じ下宿の隣の部屋へやつてきた。兄弟揃つての東大は私に聞いたことがなかつたので感心したものです。いつも先に好紀くんの部屋を開けて「おいつ元氣か」というんだが、あつまた来たというような顔でニヤリとして「いらつしゃい」と答える。恒例になつてましたね。いつ見ても壁に背もたれてコタツで勉強してたのでいづぞや「お前、勉強好きか」と聞いたことがある。ちよつと考えて「好きか嫌いかは考えたことないですね。勉強が日常ですから」と言うた。いやはや恐れ入つた。随分違った性格の兄弟で、兄は清濁合わせ飲む、といった懐の深い大人風だが弟は世の中の下らないことには関知しないといったポール・ヴァレリーの「テスト氏」みたいなところがあつて学部の学生のくせにすでに学者然としたところがありました。その兄は今や財界総理、弟は毎年ノーベル

賞候補に名前が挙がる学者の頂点、まったく大した兄弟です。社会人になつてからは私は田舎に舞い戻つてくるし、彼らは東京での活躍が始まり出すし、しばらく疎遠になつていて十倉くんとは年賀状のやりとりをするくらいになつていたが20年ほど前に私の息子が(これは親に似ずなかなか出来た)好紀くんと同じ理Ⅰに合格して東京に身元保証人がいるという。十倉くんは恐る恐る頼んでみることにした。我がことのように喜んでくれたが「ボクは横浜なので保証人にはなれないと思います。弟に言つておきます」と言つてくれた。電話一本では足りないと思ひ夫婦で高田井のお母さんを訪ねお願いした。「同郷のよしみじゃないですか。好紀にちやんと言つておきます。いつでも頼つて下さい」と言われ本当に有難かつた。当時すでに好紀くんは東大の有名教授で理系の学生の間では知らぬものがないかつた。後で息子に「あんな偉い人に頼まんでももつと氣楽な知り合いらんかつたかいな」と言われましたけど。その息子が今では好紀くんと同じ「物性物理」という分野の研究者の端くれで年に何度か学会で好紀くんと出会つて話をするそうです。不思議なご縁です。この前も電話をしてきて「十倉先生の偉いのはボクらが一番知つとるけど、お兄さんも驚くべき人だな。十倉ワンダーブラザーズは西脇のみならず日本の宝やで」と言つた。そのとおり。





# 春の花植え



西脇市駅前、1区・2区・3区の役員たち。



野村公民館、老人会の皆さん。  
みんないいおじいちゃんおばあちゃんなんですよ（知らんけど）



窪田6区会長と可憐な花。  
ミスマッチの極み。



野村公園、市役所の職員と  
6区・7区の役員たち。



同級生3人。このおっさんおばはんが  
私の一回り下やて。年がいくはずやわ。



平野口、女性の会のお姉さま方。  
黒一点は「花植え」の主宰者、高瀬参事。



「お父さんといっしょに花植え  
がんばります。」「よし、頼んだぞ」



この時分の男の子は可愛いな  
私の孫もちょうどこのくらい